「牧の昔をあるく」発刊にあたって

地域の伝統文化を引継ぎその歴史を礎にして、未来に向かって新しい地域文化を一歩一歩築きあげ歩み続けていきたいと願っています。
年配者から若者へ、大人から子供へ、村から町へ、地方から都市へ、人々は伝統の中から芽生えた新しい文化に目覚め、その心は常に動き続ける地域から発信されます。
どうぞゆっくりかみしめながら目を通して頂き、古（いにしえ）のロマンに浸って頂きたいと思います。過去から現在へそして未来へ、歴史は動き続けます。
この冊子が少しでも歴史の学びとなり、新たに湧き出る地域文化の泉として役立てば幸いに想います。
発刊にあたり編集並びに監修に携わって頂いた各委員の皆様、またご助言を戴いた地域の先輩諸氏に心中より感謝申し上げます。ありがとうございました。

平成27年3月吉日

郡上市　大和町　牧
篠 脇 文 化 顕 彰 会

牧の昔をあるく

牧の昔をあるく

もくじ

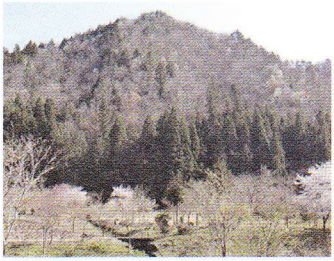
1 牧地区と東氏（とうし） …… 4
2 明建神社（みょうけんじんじゃ）と尊星王院（そんせいおういん） …… 10
3 常縁（つねより）・宗祇（そうぎ）連歌（れんが）の碑（ひ）と大門（だいもん）ざくら …… 12
4 篠脇（しのわき）三十三観音（さんじゅうさんかんのん） …… 14
5 長刀清水（なぎなたしみず） …… 16
6 千人塚（せんにんづか） …… 18
7 木蛇寺（もくじゃじ）と東氏の五山僧（ござんそう） …… 20
8 慈永大姉（じえいたいし）の墓 …… 22
9 東林寺跡（とうりんじあと） …… 24

10 篠脇霊魂堂（しのわきれいこんどう） …… 26
11 三日坂（みっかざか） …… 27
12 八神社（はっしんしゃ） …… 28
13 水神（すいじん）神社 …… 30
14 八幡（はちまん）神社 …… 32
15 白山（はくさん）神社 …… 33
16 明建神社拝殿再建の由来（ゆらい） …… 36
17 明建神社の七日祭（なぬかびまつり） …… 38
18 牧の掛踊（かけおど）り …… 40

1　牧地区と東氏

鎌倉時代の初期、今の千葉県からやって来て、約三百四十年間にわたって現在の郡上市の大部分を治めていた武士が東氏です。本家は千葉氏という関東の名門ですが、東庄という領地をもらった千葉常胤の六男・胤頼が、東を名のって独立しました。郡上に来たはじめは、剣の阿千葉に城を構え、氏神をまつる妙見神社も建てていました。阿千葉という名は千葉の分地という意味です。この時、東氏にしたがって郡上に来た武士は、一族である野田・遠藤の二氏と、家臣の埴生・日置・和田・遠藤・餌取・石神・井俣・土屋・村山・井上・河合・市村・舛田という十三氏でした。それに神官として粟飯原氏が来ました。郡上市内には今もその血をひく姓がほとんど残っていて、特に牧地区に多くみられます。

東氏は阿千葉に三代九十年ほどいましたが、その間に篠脇城を築いて牧に移りました。それから八幡の赤谷山へ移るまで、二百三十年にわたる長い間、牧地区は郡上を治める東氏の拠点だったのです。そのため、牧地



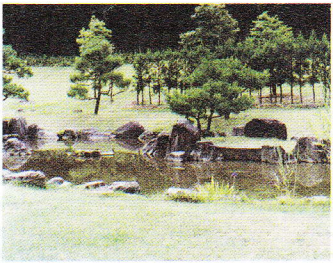
春の篠脇城

区には多くの東氏やその時代に関する遺跡や伝承が残っています。この冊子で紹介しているところもほとんどがそういうところです。

さて、東氏は和歌にとても秀でた一族でした。二代目の重胤という人は、藤原定家（百人一首を選んだことでも有名）に和歌を学び、鎌倉幕府の三代将軍・源実朝の側に仕えて和歌を教えていました。郡上東氏の初代・胤行という人は、藤原定家の子・為家に和歌を学び、その娘を奥さんにしたと伝えられています。そのような血縁もあって、東氏は和歌の名門・二条家の歌学を受け継ぎました。その中にあって特に優れた歌人が、郡上東氏九代目を継いだ東常縁です。常縁は、歌道の基本ともいえる古今和歌集を究めており、その教えを受けに連歌師の宗祇がやって来ました。常縁は古今和歌集の歌の読み方などの講釈をし、特別な秘伝は切紙というものに書いて伝えました。これを古今伝授と言って、東常縁がその形式を確立したのです。このことは、日本の文学史上でもたいへん有名な出来事となっていて、東常縁は「古今伝授の祖」として長く尊敬されています。

また、常縁には、和歌を贈り、奪われた城と領地を取り返したという有名な話が残っています。日本中が真っ二つに分かれて戦乱に明け暮れた応仁の乱の時のことです。東氏は東軍細川方についており、篠脇城は西軍山名方の有力な武将であった土岐氏守護代の斎藤妙椿に、落とされてしまいました。それを嘆いた常縁が十首の歌を妙椿に贈ると、感激した妙椿は、戦わずして城と領地を返してくれたといいます。司馬遼太郎という著名な歴史小説家が、このことを『街道をゆく』に書いており、「東常縁は歴史上もっとも高い原稿料をとった」と紹介しています。

東氏は和歌のみならず、漢文学の分野でもたいへんな才能を発揮しました。鎌倉時代末期から室町時代にかけて、南禅寺や建仁寺などの禅宗の僧の間で、詩文や日記などの漢文学がとても盛んになります。これを五山文学といって、この時代の中心的な文化を成しています。東氏の人たちからも、京都の南禅寺や建仁寺の住職を務めるような優秀な禅僧がたくさん出ました。当時の南禅寺や建仁寺の住職というのは、現代に置き換えれば、東京大学や京都大学の学長といってもいいような



名勝　東氏館跡庭園

トップクラスの学者に相当します。牧の地名に残る木蛇寺は、禅宗のお寺で、東氏の人たちもここで修行を積んで京都に上ったのです。

さて、二百三十年間も続いた篠脇城での東氏の統治は、どうして終わることになったのでしょうか。

関ヶ原の戦いが始まる六十年前のことです。今の福井市一乗谷に拠点を持っていた越前朝倉勢が攻めてきました。白鳥の長滝寺に残る記録によると、朝倉勢は今の九頭竜ダムのある方角から石徹白に入り、長滝寺を通ってきます。長滝寺で乱暴狼藉を働いた後、篠脇城を攻めましたが、城は堅固で落ちず、一ヶ月後には追い返されています。朝倉勢を追い返したものの、篠脇城下は、その戦いで大きなダメージを負うこととなりました。結局、ここでの復興をあきらめ、篠脇城を廃して、八幡町の赤谷山（現在の郡上市役所の裏）に移ることになりました。赤谷山には常縁の父・益之が支城を築いていましたが、同じ山ながら少し離れた所を城としました。人々はそこを東の殿様の山という意味で東殿山と呼びました。

東殿山を拠点とした東氏の治世は、長く続きませんでした。八幡に

東常縁

移ったのは十一代・東常慶のときですが、常慶は朝倉勢との戦いで功のあった木越城主の弟である遠藤盛数に娘を嫁がせていました。遠藤氏が大きな力を持つようになっていたのです。ところが、常慶の後継者となるべき東常尭は、縁談に関わる怨恨で木越城主であった盛数の兄・胤縁を殺してしまいます。そこで盛数は、この事件をきっかけに、本家である東氏を滅ぼして跡継ぎとなったのです。その戦いを「赤谷山の戦い」といいます。遠藤盛数は苅安城（現在東海北陸自動車道の美並ＩＣになっている山）を本拠としていましたが、赤谷山の東氏を攻めるにあたって、八幡山に陣地を置きました。その陣地が後に郡上八幡城となり、近世の城下町が築かれていったのです。

こうして東氏は滅んだものの、その血は遠藤氏に受け継がれていきます。そうすると、東氏およびその一族である遠藤氏による郡上の治世は、実に四百七十年間も続いたことになるのです。そして、そのほぼ半分が牧の篠脇城だったのです。

●東氏＆遠藤氏略系図

- 千葉常胤
  - 胤政（千葉介）
  - 師常（相馬）
  - 胤盛（武石）
  - 胤信（大須賀）
  - 胤通（国分）
  - ①東胤頼（源頼朝より下総国香取郡東庄を与えられ東氏を名乗る）
    - ②東重胤（和歌を定家に学ぶ。実朝に仕え、東家歌道の礎を築く）
      - ①東胤行（承久の乱の戦功で郡上を与えられる。初代郡上東氏）
        - ④東氏村（阿千葉城から篠脇城に拠点を移す。）
          - ②東行氏
            - ③東時常
          - ⑦東益之
            - 慕龍龍攀（幼少の一休禅師の師）
            - 江西龍派（第一五四世建仁寺住持）
            - 南叟龍朔（常縁の兄。明国に渡る）
            - 正宗龍統（第二一七世建仁寺住持 墳記など東家の史書を残す）
            - ⑧東氏数
              - 常庵龍崇（第二六一世建仁寺住持）
              - ⑨東常縁（連歌師・宗祇に古今伝授をする）
                - 美濃遠藤氏（遠藤氏は代々東氏の重臣。常縁の末子が盛胤とする説）
                - 遠藤盛胤
                - 遠藤胤好
                - ①遠藤盛数（初代郡上八幡城主）
                - 遠藤胤縁（木越城主）
                - 女
                - 山内一豊
                - ②遠藤慶隆（郡上を統一するも加茂郡へ移封、十二年後の関ヶ原で郡上復帰。）
                - ④常友（白雲水を整備『常縁集』編纂）
                - ⑥常久（七歳で没 郡上領没収）
                - ⑪東常慶（朝倉氏来襲を機に篠脇城を廃城とし八幡赤谷山に移る）
                - 女（友順尼）
                - 東常堯（赤谷山城の戦いで盛数に破れる。天正十三年帰雲城下の大地震で没）
- 三上遠藤氏（三上藩は現滋賀県野洲市の一部 常時江戸詰めで三上は陣屋のみ）
  - ①胤親（大垣藩戸田家より養子 常陸・下野に転封 すぐに近江三上へ転封）
    - ③胤忠（「古今伝授」三巻など残し東家の学徒としての意気込みを見せる）
      - ⑥東胤城（明治維新を迎え、同十一年東と改姓）
        - ⑧東胤駿（平成六年、文書類全てを東氏記念館に寄贈。同十七年郡上にて没。）

2　明建神社（妙見神社）と尊星王院

十三世紀のはじめ、東氏が下総国から郡上に来た時、本家・千葉氏の守護神である妙見菩薩の分身を移し、氏神として祀ったのが妙見神社です。妙見菩薩は北斗七星を菩薩としたもので、国土安穏、寿福円満、国王保護の菩薩とされます。東氏は剣に阿千葉城を構えたので、妙見神社もはじめは剣にあり、篠脇城に移った時に現在の地に移しました。明治時代になって、妙見から明建へと表記が変わります。昔はどこも「神仏習合」といって神も仏も同じものとみなしていたのですが、神道で国を治めようとした明治政府は、神仏分離令を発してそれを許さなかったのです。そこで、祭神を国常立尊、神社名を明建神社と改めました。しかし、それは表向きのことで、現在もご神体は妙見菩薩です。現在、神社名は「明建」で、地名は「妙見」と表記します。

天文十年（一五四一）、東氏は篠脇城を廃して八幡の赤谷山に城を移しましたが、氏神はこの地に置いたままでした。東氏の後を継いだ遠藤

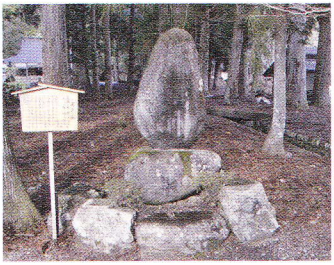
毎年薪能の会場になる明建神社

氏も、そのまま崇敬(すうけい)しています。隣接して別当寺である尊星王院(そんせいおういん)がありました。尊星王とは妙見菩薩の別称です。応仁二年(一四六八)、斎藤妙椿が篠脇城へ来襲したおりに兵火にかかって全焼し、その後再興されましたが、朝倉勢来襲で再び失われたと考えられます。

神社の本殿は、流造(ながれづく)りで、間口五・六m、奥行き三・三m、高さ五・五m。享保七年(一七二二)六月再建の棟札(むなふだ)があります。拝殿は、※民造(たみぞう)事件によって取り壊され、天保十五年(一八四四)九月に再建されました。

本殿・拝殿の周囲及び正面参道(縦大門(たてだいもん))五十mの両側には、周囲一m以上のスギ・ヒノキ・ケヤキなどの古木百三十本あまりが茂り、横大門(よこだいもん)の桜並木道は、春にはヤマザクラやソメイヨシノなど百本余が美しい花を咲かせ、秋には彼岸花が燃えるように咲きます。桜並木の両側に立つ神帰杉(かみかえりすぎ)(西端)と神迎杉(かみむかえすぎ)(東端)の大木は、どちらも推定樹齢七百年といわれ、周囲は七～八mほどあります。この二百三十m余の横大門は、篠脇城付の馬場(ばば)跡と伝えられています。

※民造事件……36ページ



3　常縁・宗祇連歌の碑と大門ざくら

花盛りところも神の御山かな　　常縁
桜に匂ふ峯の榊葉　　宗祇

文明三年（一四七一）、連歌師宗祇は東常縁を訪ねて古今伝授を受けました。その後も何度かのやり取りの末、文明五年四月十八日に、すべての伝授が完了します。この連歌は、そのことを氏神妙見神社に報告し、喜びを詠み交わしたものとされています。

「発句の〝花盛り〟は、いうまでもなく妙見の神域に満開美を誇っている桜で、脇句の〝峯の榊葉〟は広く神域に生えている常緑樹一般を指す。この桜は一本や二本ではなく花の集団であり、今見る桜並木のけんらんたる美の世界と別のものではない気がする。少なくとも二五〇年ほど前に、謡曲『くるす桜』が書かれており、妙見の桜並木は桜の名所として近隣に有名だったことが分かる」（郷土文化誌『郡上』の一文を要約）と、故野田直治さんは書かれておられます。

桜のトンネル　大門ざくら

この頃常縁は宗祇を案内して八幡町那比新宮を訪ね、二人で次のような連歌も詠んでいます。

神もここにいくよか夏を杉の森　　常縁
宮井はなれぬ山ほととぎす　　宗祇

すべての伝授を終えた常縁は、八幡町にある現在の宗祇水まで宗祇を送り、次の餞別の歌を詠みました。

もみじ葉の流るる竜田白雲の花のみよしの思い忘るな

この歌から宗祇水は、「白雲水」とも呼ばれています。

江戸末期、妙見神社三十三代神主の粟飯原豊後は、この連歌碑の建立を思い立ちました。当時親交のあった和歌俳諧の大家であった大野春彦に連歌の揮毫を得ていましたが、その成果を見ずして亡くなってしまいました。その後、日置弥一郎が遺志をつぎ、明治三十三年九月に完成しました。歌碑の裏側には

花盛り春はことさら秋もまた
もみじ染ぬる神の庭前

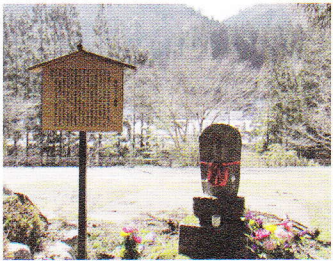
菅原春海記す　とあります。

4　篠脇三十三観音

篠脇城へ登る道の傍らには、九十九折の角ごとに石仏が建てられ、道行く人の安全を見守ってくれています。石仏は、三十三観音像で明治四十三年、瀧日又平治、日置弥一郎、金子七之助の発起によって旧山田村内から広く篤志を募って建立されました。

この時の建設趣意書を見てみましょう。

「志ノ脇山は、承久初年から永禄年中まで郡上郡を治めた東氏累代の城跡である。即ち、承久初年平氏の一族平良文の後裔である中務丞平胤行が、時の将軍の命により関東からここに来て一城を築いて後十一代居城した。累代の城主は当郡未開の時に入ってこれを開き、農事を進めるなど其の功績多いことは先人の口伝するところであって、当郡の歴史上重要な地である。しかし、今は人馬の跡を絶ち、年を経るに従って埋没に帰せんとすること甚だ遺憾に堪えないので、有志回りここに三十三観音像を建てて一つは当郡の歴史を高揚して永く末世に



神迎杉下の第一番観音像

伝え、一つは山上の忠魂碑の装飾に資せんとする所なり」とあります。

前年には本丸跡に忠魂堂が建てられており、篠脇城攻防の合戦で討死した多くの将兵たち、近くは日清・日露戦争による戦死者を慰霊するため建立されました。

石像の台座には寄進者の氏名が刻まれています。

三十三の観音像は、一番が神迎杉下、二番が古今橋詰め、三番が古今伝授の碑近く(二・三番は圃場整備の際に移動)、四番から十五番が九十九折登山道の西角に建ち、十六、十七、十八番は本丸跡、十九番から三二番は頂上から麓へ下る東角に、三三番は田畑橋近くに建っています。

観音像の種類は、如意輪観音像八体、聖観音像十一体(立像十体、坐像一体)、千手観音像十一体(立像九体、坐像二体)、十一面観音像二体、馬頭観音像一体で、いずれも彫りは浅いものです。

石工は、武儀郡曽代の石忠で、石材は妙見字木戸口から採ったと記録に残っています。

5　長刀清水（なぎなたしみず）

「長刀」って何か知っていますか。長い刀と書くように長い柄の先に、広く長くて反り返った刃をつけた武器のことです。この清水にどうしてそんな「長刀」という武器の名が付いたのでしょうか。

また、この清水には別の呼び方もあります。「木戸口（きどぐち）清水」「千代（ちよ）清水」とも呼ばれているのです。「木戸口」には、篠脇城下の玄関口という意味があって、そこにある清水ということになります。「千代」は、女性の名前です。

木戸口にある「長刀」と「千代」、いったいどんなつながりがあるのでしょうか。

それは、今からおよそ六百年も前、一四四一年のことです。時代は室町。天皇は後花園（ごはなぞの）天皇。将軍は足利義教（あしかがよしのり）のころです。その夏は、大変な日照りが続き、谷川の水もすっかり涸（か）れてしまい、人々は毎日の飲み水さえ十分手に入れることが出来ない有様でした。特にお百姓さんたちの

長刀清水

苦しみは大変なもので、神様や仏様に供える水さえも無く、人の命をも失いかねない様子でした。里の人達は妙見神社に祈るしかなく、毎日多くの人がお参りをしました。この農民達の様子を見た東家家臣埴生家※の娘千代は、人々に同情し、水神様を祀って次のような和歌を一首捧げ、一心に祈りました。

み仏に手向けの閼伽も水無月の神に祈りて久留栖野の里

（仏様にお供えする水も無く神様にいのるしかない栗栖野の里）

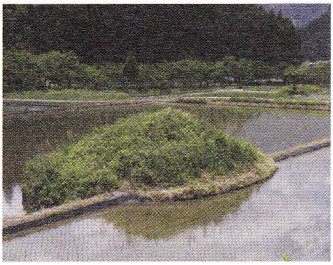
すると、その夜、夢に神のお告げがありました。それは、「木戸の清水を掃除して、罔象女神を祀ればその効で水は永久に絶えないだろう。」と言うものでした。千代は喜び、早速その場所に水の神をまつり、そこを長刀の石突きで突くと、こんこんと清らかな清水が涌き出しました。この清水で多くの里人が救われました。掘られた清水の形も長刀に似ていたので、人々は長刀清水と呼ぶようになりました。また、和歌を詠み、里人のために祈りを捧げた千代に感謝して、その名を清水につけて呼ぶこともあったのです。

埴生家……神祇取り計らい役

6　千人塚（せんにんづか）

木蛇寺あたりの県道から三つの塚を見ることができます。東の道路脇にあるのが田口塚（たぐちづか）一号墳。その向こうが同二号墳。西の塚が同三号墳で木蛇寺塚とも呼ばれています。これらは「千人塚」と呼ばれており、多くの人々が埋葬された塚だと伝えられています。

戦国時代、日本各地の武将は勢力争いを繰り返し、戦の絶えない時代でした。この地も例外ではなく、天文（てんぶん）九年（一五四〇）八月に越前の朝倉勢が篠脇城に攻め寄せてきました。朝倉は、現在の福井市一乗谷を拠点とした強大な戦国大名です。郡内の氏族を集めてどうやって防ごうかと会議を開きましたが、朝倉勢の強大さを恐れて何の策も考えつきません。そんな中、遠藤胤縁（たねより）・盛数（もりかず）兄弟が進み出て、当たり前の戦い方では勝ち目がないかも知れないが、城山の地形を利用して、上から石を投げ落とす作戦が良いのではないかと申し出ました。皆は直ぐにこの考えに賛成し、家来たちに川原の石を城山に運ばせることにしました。



木蛇寺塚とも言われる三号墳

朝倉勢は、どんどん城に攻め寄せてきました。城ではわざと敵が近づくのを待ち、攻め上るところを、用意していた石をいっせいに投げ落としました。相手がひるんだ隙(すき)をついて後ろからも攻め、敵を大勢討ち取り、九月二十三日にはとうとう残った朝倉の兵を追い返してしまいました。兵力の強い朝倉勢に、東氏側は地の利を得て勝つことが出来ました。今も篠脇山に登ってみると、その昔、石を投げ落としたのであろうと思われるたて堀の跡を見ることが出来ます。

東の二つの塚は、その時の敵の兵士の首塚だと言われています。たいへんな激戦だったため、死者の数がおびただしくその数数千人という意味で「千人塚」と呼ぶようになったのでしょう。この戦いで東氏は勝利したものの、城下はすっかり荒れ果て、翌天文十年(一五四一)には、篠脇城をあきらめて、八幡赤谷山へ移ることになりました。

なお、西にあるひときわ大きな三号墳は、「木蛇寺塚」とも呼ばれ、戦いで荒れ果ててしまった木蛇寺の遺物が埋められているとの言い伝えがあります。

7　木蛇寺と東氏の五山僧

木蛇寺は、禅宗の寺で東氏の菩提寺として崇められていました。二代行氏のときに、林叟徳瓊を開祖とし、二代目は龍山徳見という名高い立派なお坊さんだったとされます。

鎌倉時代末期から室町時代にかけては禅宗のお坊さんを中心として漢文学がたいへん栄え、五山文学といってこの時代の文化を代表するものでした。東氏には木蛇寺出身のお坊さんで、この五山文学者として世に名を残した立派な人が多くいます。

常縁の伯父さんにあたる江西竜派は、漢詩に優れ、京都の建仁寺や南禅寺の住職まで務めました。その弟の慕哲竜攀は幼い頃の一休さんに、詩を作る方法を教えた先生でした。「木蛇寺殿墳記」や「尊星王院鐘銘」を遺した常縁の弟・正宗竜統は、木蛇寺住職から京都建仁寺の住職となり、足利義政の三十三回忌説法まで勤めたという立派なお坊さんでした。常縁の子の常庵竜崇も建仁寺の住職になっています。

木蛇寺跡

木蛇寺は、残念なことに、応仁二年（一四六八）、斉藤妙椿が篠脇城を攻めたときの兵火で焼失しますが、文明五年（一四七三）、正宗竜統によって再建されます。現在、木蛇寺跡とされる場所は、内会津（うちがいつ）という字（あざ）のところにあり、「木蛇寺」という字は谷を挟んだその東側になります。おそらく焼失前の木蛇寺は東（字木蛇寺）にあり、再建にあたって寺地が狭かったため、西側の内会津に移したと考えられます。

その後、東氏の滅亡とともに木蛇寺も廃寺となりました。寺は無くなっても、その香りは伝説として残っていきます。山崩れで破壊されて残った欄間（らんま）（木彫りの龍）が、美並町苅安にある乗性寺（じょうしょうじ）へ、残った用材は母袋西宝寺の普請に使われたという伝承があります。また、斎藤妙椿が攻め寄せた時、木蛇寺仏を妙見牧ヶ洞へ避難させ、その後行方不明となりますが、現在、遠藤高真さん宅には、木蛇寺本尊と伝わる仏像が安置されています。さらに、寺の残骸は木蛇寺塚（田口谷塚三号墳）に埋められたと伝えられているのです。

8　慈永大姉の墓

苔むした二つの墓標の真ん中に小さな宝篋印塔があります。二つの墓標には、東氏代々の法名が刻んであります。これは、明治三十六年に日置弥一郎が発起し、遠藤家旧家臣・松井仁内という人の寄付を元に、ゆかりのある人達の志によって、建立されました。真ん中の宝篋印塔は、それよりずっと古く、今からおよそ六百年ほど前、室町時代に立てられたものと思われます。郡上市の文化財に指定されています。高さは約八十九センチ。裏に「慈永」と刻まれています。慈永は、東常縁夫人と伝えられていましたが、東尚胤の母で東氏十代元胤夫人と思われます。いったいどんな人物だったのでしょうか。

常縁の子で木蛇寺住職から京都の建仁寺の住職にまで出世した常庵竜崇は「慈永大姉を祭る文」に「風格が厳正でおくゆかしく、ふだんの志がふかく澄みわたり、喜怒哀楽に流されることがなかった」と記しています。「姿がとてもきちんとしており、決して威張ることなく、考

真ん中の宝筐印塔が慈永大姉の墓

え深く、前向きで純粋、その上冷静な判断力を兼ね備えていた」最大級の表現です。さぞかし優れた人柄だったのでしょう。元胤が亡くなった時は四十三歳で、慈永は髪を落として尼になっていましたが、先頭に立って解決しなければならない大小様々な問題があったようです。

「わる者が隙をねらって、しばしば我が城を襲った。」と、祭文(さいぶん)に書かれていますが、慈永はこのことを一笑に付し、少しもあわてず自ら陣頭に立って、賊兵(ぞくへい)を打ち払ってしまったので、家来達は「女丈夫(気性のしっかりした女性)」と言って、信服しました。

また、人々の暮らしが良くなるよう、政治にも心を砕いたので、領民は、慈永を尊敬しその徳をたたえました。慈永は永正(えいしょう)三年(一五〇六)二月六日に亡くなっています。記録によると、ふとしたことから病床について二ヶ月、ある夜、起きあがってきちんと正座し、眠るように静かに亡くなったとあります。見事な最後です。年齢ははっきり記されていませんが、六十歳を少し過ぎていたようです。

東林寺跡の古墓群

9　東林寺跡

東林寺跡は元兼の東の山すその林の中にあります。室町時代に東氏一族によって創られた尼寺です。初代の住職は東益之の娘、素順尼と伝えられています。東常縁の妹です。父益之は武人としても文化人としてもたいへん優れた人でした。十五世紀の初めころ、郡上は度々大洪水にみまわれましたが、益之は領内の住民を集めて堤防を築き、道路を復旧し、原野を開墾するなどして、人々の暮らしの向上に努力しました。ところが、永享十年（一四三八）、関東で鎌倉公方足利持氏が将軍義教に背くという事件が起きました。関係した千葉氏の同族といういわれなき罪で処分されます。益之は、周防（現山口県）に流され、娘である素順尼も郡外に流され、常縁は自邸に幽閉（外出禁止）されます。そのため、東林寺は妹の宗雲尼が住職二世になりました。

後に益之親子の罪は許されますが、誤解が解けるきっかけは、歌一首でした。「常縁が和歌で城を取り戻す」以前に、父である益之もまた、歌

東林寺跡から掘り出された懸仏と和鏡
（栗巣・応徳寺）

で罪を解かれたのでした。その後、罪を許された素順が三世として東林寺の住職を務めます。

東林寺は、天文九年（一五四〇）、越前朝倉勢が篠脇城を攻めたとき、焼けてしまいました。この辺りには、鐘堂屋敷・内屋敷・大門跡・池の尻などの地名が残っています。

白鳥町長瀧寺の過去帳（お寺にある死んだ人の法名が書いてある帳面）に、東林寺には常縁の兄弟十名の墓があると書かれています。東林寺跡の立て札の奥を少し登ると、小さな五輪塔が一列に並んでいます。その内の一基は壊れていますが、数えてみると確かに十基あります。

その後、尼寺は復興しませんでしたが、宝暦九年（一七五九）、地主の彦右衛門に夢のお告げがあり、寺跡から掛仏六体と和鏡二面が掘り出されました。早速八幡のお殿様にどうしたものかと相談したところ、寺へ預けるのが良いだろうと言い渡されました。

現在栗巣の応徳寺には、その由来書と一緒に祀られています。それらは、昭和五十六年に岐阜県の重要文化財に指定されました。

篠脇城本丸に立つ霊魂堂

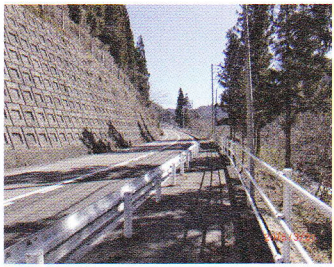
10 篠脇霊魂堂

篠脇霊魂堂は、篠脇城址本丸（一の曲輪）跡に建てられています。明治四十二年（一九〇九）牧区の日置弥一郎、瀧日又平治の二人が発起人となり、山田村の有志により建立されました。大工は大間見の青木好四郎とされています。

堂内には東氏の先祖第五十代桓武天皇の皇孫高望王を始め、平家の先祖平良文、東氏初代胤頼、二代重胤、三代胤行（郡上東氏初代）より郡上東氏十一代常慶までの歴代城主の位牌が祀られています。

また、旧山田村の日清・日露戦争の戦死者の位牌も祀られています。牧区では毎年、妙見桜が花盛りとなる四月中旬に、東氏ゆかりの乗性寺（美並町苅安）住職を招いて、霊魂堂前で法要が行われています。

平成九年秋には、篠脇文化顕彰会が広く寄付を募って堂宇を改築しました。



道路改良で当時の険しさは
なくなった三日坂

11　三日坂（みっかざか）

古今伝授の里フィールドミュージアムの東、石仏谷（いしぼとけだに）から三田（さんでん）に至る約二〇〇m余の間は、通称「三日坂」と言われる古戦場跡です。今でこそ広くなだらかな道ですが、道路改良が行われる以前は、狭くて急な坂道が曲がりくねり、この地域で一番の難所でした。

天文九年（一五四〇）に越前朝倉勢が攻めて来たとき、この辺りは激戦地で、双方の死骸で三日間往来ができなかったといわれ、三日坂の名が残っています。『遠藤家御先祖書（ごせんぞしょ）』は、その激戦の様子を次のように記しています。

「敵を大勢討ち取り、九月二十三日に残党みなみな追い返し候。敵勢おびただしく討たれ、道をふさぎ往来は三日通れず、ここをいま三日坂と申す、討ち取りし敵の首塚いま千人塚と申す」

三日坂の中ほどに、道ゆく人々の安全を守ったという二つの石仏があります。この石仏を夜中に三回まわって拝んでいると、美しいお姫様が現れ、お茶を出してくれるという伝え話が残っています。

12　八神社（八神神社とも）

牧の集落に入り栗巣川沿いにゆくと、右手に元兼の集落が見えてきます。元兼の鎮守社は、八神社です。古代の土器遺物も境内に埋もれていたということで、ずっと昔から信仰されている古いお宮です。地元では八応神様（はちおうさま）と親しまれ、集落の守り神として大切におまつりされています。

ご本尊は、元兼の東の山すそにあった東林寺の脇侍といわれる聖観音菩薩です。木造彩色の立像で、江戸時代に妙見神社のご開帳（特定の日に限って秘仏などを拝むことができる）の折に貸出したという記録も残っています。

このご本尊にかかわる恋の伝説が伝えられています。

むかし、このお宮の禰宜をしていた男に、近くに住む娘がひそかに思いを寄せていたそうです。娘は何とか会いたい、会ってほしいという一心で「はちおうさまのご本尊を持出したら声をかけてくれまいか」と、ご本尊を近くの清水で洗っていました。ご本尊をさがしていた禰宜の男に

元兼の鎮守社・八神社

叱られ願いはかないましたが、ご本尊はところどころ剥げてしまったということです。当時のお宮は、村人にとって今よりも、もっと身近なものだったのです。

お祭りは、毎年九月一日に行われています。八朔（旧暦の八月一日）に、十二戸の氏子が集まり、神社の庭で、桧の葉の上に肴をのせ、お神酒を神にふるまい五穀豊穣を祈りました。八神社の禰宜は、本田治郎作家が代々つとめています。禰宜というのは、神社のお社やご本尊を守り、祭りを執り行う神職のことです。

掛踊りの歌には、次のように歌われています。

ヘここに鎮座の神様は
八応神と　申しあげ
東西南北　よろず事
お守りくださる　神様よ

境内の北側には、『昭和万葉集』（一九八〇）に選集された本田久枝の歌碑が建っています。

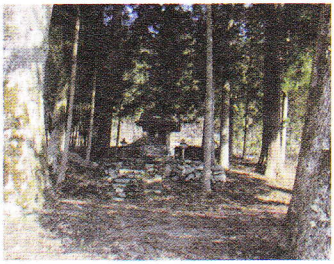
日照りつつ九月に入りしこの夕べ草生の中に韮の花咲く

13　水神神社

嘉吉元年（一四四一）夏、この里は日照り続きで苦しみましたが、東氏家臣の娘千代が、神に祈り歌をささげ湧き出た清水で救われたと伝えられています。後に、この長刀清水の水の神を、木蛇寺の禰宜嘉兵衛に預けてこの地にお祀りしたところ、いたるところから清水が湧き出たといいます。地元では、水神神社を「おすいぶんさま」と呼び親しまれています。「清水廻り」という地名も残っていて、次のような記録があります。

現在の大塚製材の裏手に「もんざ」という家があった。その横手の辺に、山のサコの伏流水がチョロチョロ流れ出し（中略）イワスハナにむけ、山裾を行き、三尺坊大権現の碑の建つ辺から栗巣川に落ちていたらしい。この清水は、一帯の田数反をうるおしていた。なお、子どもの頃、この清冽な清水の中にシジミ貝がいたことを記憶する。この清水の流れにそって栗巣街道はあったと思う。（金子徹「牧史談会　会誌」第二号）

また、清水にかかわる伝説もいくつか残されています。むかし、遠藤常友という殿様が厄除け祈願に絵馬を奉納したそうです。絵馬の中の



ムクロジの大木が立つ水神神社

馬が、夜な夜な近次の御手洗清水の水を飲みに抜け出し、作物を荒らしたため絵馬に杭と手綱を書き添えたところ、その後は抜け出すことはなくなったということです。この絵馬は、大和町の文化財に指定されており、東氏記念館で見ることができます。また、八幡の殿さまの青山侯が、妙見神社にお参りに来られた折り、清水廻りの榧の木のもとで清水を飲んで休憩されたという話も伝えられています。

現在の祭神は、明治二十六年(一八九三)金子七之助の寄進によるもので、お堂は寛政四年(一七九二)の建立、大工は藤原朝臣遠藤伝兵衛と伝えられています。

神社境内にそびえる大木はムクロジで、郡上市の天然記念物です。幹の周囲三・一八m、樹高二六m、樹齢は二、三百年と推定され、六月頃に淡緑色五弁の小花をつけ、秋の黄葉は美しく見事です。

掛踊りの歌には、次のように唄われています。

〈昔嘉吉の　元年に　長き日照りに　水が絶え
五穀草木も　皆枯れて　人の命も　あやうしと
妙見様へ　願かけし　千代女の歌を　きこしめし
水を賜いし　神様よ

14　八幡神社

東氏が郡上を治めていた頃、家臣の遠藤伝六郎は、武道を志し修行のお守りに弓矢八幡を祀ったのが、現在の八幡神社のはじまりといわれています。

八幡神社は、八幡大菩薩がご本尊で、鎌倉幕府の守護神として、また広く武道の神、弓矢の神として信仰されました。村の神社と言えば八幡神社といわれるほど親しまれ、現在も日本中に数多く祀られています。

ご神体は八幡大菩薩のお姿である木像の応神天皇と、その母の神功皇后、応神天皇のお后である沖津姫の三体です。

ご本尊の台座には、天保十五年（一八四四）辰年八月一日に、妙見神社神主の粟飯原武蔵常流により開眼供養が行われたことや、三体の祭神は和良郷中之保の山伏右京が作ったこと、発願者は遠藤伝四郎忠六であることなどが記されています。開眼供養というのは、新しくできた神仏に魂を入れる儀式のことです。

お八幡と親しまれている八幡神社

本殿は流造で、江戸時代の終わりころに再建されています。神社は、神の住まいで、端正なたたずまいの中、清々しい空気が流れています。

お祭りは、毎年旧暦の八月一日、現在は九月のはじめころに行われており、八朔祭りです。二百十日（立春から二百十日目ころは台風が多く稲の開花期にあたる）をひかえ、秋の収穫の無事を祈ったのです。お八幡（おはちまん）といって、遠藤家と田畑地区の氏子が集まり、宮草打ち（神社や境内を清め草刈りを行う）の後に、お祭りを行っています。

掛踊りの歌には次のように歌われています。

〈ここにまします　神様は
昔東家の　武士で
遠藤六郎と　申す人
武道修行の　守り神
今は我らの　氏神よ
上げ奉る　掛け踊り

〈引　歌〉
アー　神も幾世か　この杉杜に
鎮座ましまし　わが里人を
守りたまいし　ありがたや
イヨー　ありがたや　ありがたや

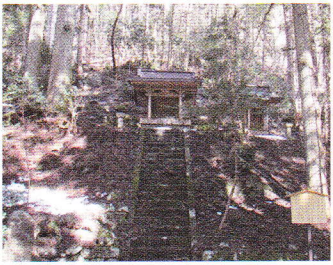
15　白山神社

白山神社は、寛平年間（八八九～八九八）に東俣村の藤十郎が和田家の氏神として、白山権現を祀ったのがはじまりと伝えられています。その後、村の鎮守の神となりました。現在の氏子は古道三戸と三田十四戸の十七戸で、禰宜は和田藤十郎家です。

明和二年（一七六四）十月の棟札は、西俣村の大工藤原朝臣別当村井助四郎建立と記されています。祭神は白山妙理大権現で、お姿は木造聖観音菩薩・虚空蔵菩薩・千手観音菩薩の三体が祀られています。

白山神社には、二つのお堂が並んでおり、東側の薬師堂には木像薬師如来が祀られています。明治の神仏分離の折りに、妙見神社から移したのではないかと伝えられています。お堂は、明治三十六年（一九〇三）に再建されています。

昔、神社の脇を流れる女子谷の洪水で社が流され、流れ着いた下流の斎藤家に仏像はしばらく安置されていましたが、その後現在の地に祀



「女子宮（おなみや）」と呼び慣わす白山神社

られたという伝承が残っています。地元では、この宮を「女子宮（おなみや）」と呼び慣らわしています。つい先年まで禰宜の和田家では、先祖代々長きにわたって、正月、五月の節句、盆、十月の神送り（出雲へ旅立つ神々や田の神が山へ帰る月）など神へ給仕の折には、身を清め神職の正装を整え、御社（ごしゃ）の神々を大切にお祀りしてこられました。

掛踊りの歌には　次のように唄われています。

〈ここに鎮座の　神様は
東家の家臣　藤十が
加賀の白山　権現の
神をまつりて　宮たてし
今は我らの　氏神様

牧には、八神社、水神神社、八幡神社、白山神社と四つの小さな鎮守の社があり、明建神社とともに、その神仏は牧の村や人々を長いあいだ見守り続けています。

16　明建神社拝殿再建の由来

今から二百年近く前のことです。やがて妙見神社の拝殿を建て替えることになる大事件が起こりました。

時は、文政十一年（一八二八）九月二十一日午後四時ごろ、郡上青山藩の家臣梶村来太郎（かじむらいたろう）は、日頃から仲良くしていた剣村のまきという女性を連れて妙見宮の拝殿でお酒を飲んで遊んでいました。それを八幡で藍染を営む紺屋（こうや）半助の日雇い職人であった民造（たみぞう）が聞きつけました。民造はまきの前夫です。てて島路（しまみち）（元兼から栗巣川左岸沿いに島を通って妙見へ出る道）を通り、刀の抜身を傘の中に隠し持って駆けつけたと言います。二人の密行を知った民造は、恋の敵とばかりに拝殿内で切りかかり、来太郎を殺してしまいます。民造と来太郎の渡り合う怒声は、対岸の田畑まで聞こえたと言います。まきにも傷を負わせ、殺そうと追いかけますが見失ってしまい、最早これまでと宮下の栗巣川で腹を切り、果てました。その岩を民造岩といいます。今の古今橋のすぐ下、栗巣川の左岸の岩

です。その頃、岩のあった場所は大きな渕だったといいます。

まきは逃げて民家に隠れ助かりました。しばらく村預けとなっていましたが十二月に赦免となり、後日、助けてもらった民家へお礼として鍋が贈られたといい伝えられています。

一件落着したものの牧村は大騒動です。神聖な社殿が汚れたとあって取り壊しの上再建することになりました。十一月には拝殿を取り壊し、拝殿跡地を一尺(約三十cm)、庭を二寸(六cm)ほど掘り下げて清めました。再建については牧だけではとうていできません。大世話方には八幡の水谷亦七郎、村方は剣村半四郎、牧村伝四郎、徳永村甚助に依頼したと記録されています。郡内のみならず郡外や遠くは越前方面へも出向いて資金を集めました。大変な労力と資金を費やし、建物が出来上がったのは事件から二年半後、完全に出来上がったのは天保十五年(一八四四)九月。実に十四年余の歳月を要したのでした。

なお、民造の墓と伝えられるものが山麓にありましたが、現在は恩善寺の無縁墓地に移されています。

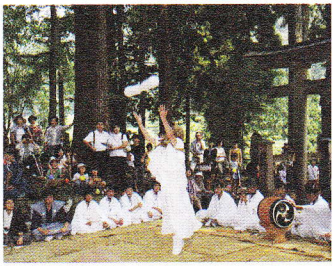
渡御の行列

17　明建神社の七日祭（なぬかびまつり）　岐阜県重要無形民俗文化財

毎年八月七日（以前は七月七日）に奉納される七日祭は、東氏が千葉から伝えたとされています。八百年近い歴史があると考えられますが、神社に残る資料では、元禄六年（一六九三）に奉行所に届け出たものが最も古いものです。内容は現在の儀式とほとんど変わっていません。

祭礼に出る者（奉仕者）は宮坐制（みやざせい）といって役柄が代々それぞれの家に引き継がれていくものです。奉仕者は祭礼の一週間前から潔斎（けっさい）（獣肉食を断つなど身を清めること）をするなど、神事は極めて厳粛に執り行われます。奉仕者のうち神輿（みこし）を担ぐ四人は落部（おちべ）区の氏子で、この参加がないと神輿は動かないといわれています。東氏が下総国から妙見菩薩を担いできた先祖が落部に住みついたからと伝えられています。

祭礼当日の奉仕者は、全員水浴し心身を清浄にして集合します。本殿から神輿にご神体（幣）を移す「神移りの儀」など一時間ほどの神事が終わると渡御（とぎょ）という旅行に出ます。渡御は神の霊力を復活させるリフ



野祭り　杵振りの舞

レッシュ休暇のようなものです。①先導（露払い）　②宮司　③子禰宜　④献幣使　⑤弓取り（二人）⑥神輿（担手四人）　⑦拍子音頭とり　⑧杵振り　⑨笛吹　⑩太鼓（打手一人担手二人）　⑪猿田彦面（鼻高）　⑫獅子（四人）　⑬篠葉踊子（子供八人）の順に行列をなし、まず拝殿周囲を三回まわり、次いで縦大門、横大門を練り、約三〇〇m先の神帰り杉まで往復します。この間拍子音頭とりが「カミノミウケンナル、タケノハヤシボーンボ」と唱えると、篠葉踊子たちは一斉に「サーンヨシボーボ」と唱和します。同時に獅子は頭を高く上げて周囲をにらむように見まわし、口を大きく開けて篠葉踊子たちの持つ竹はやしを噛むように歯を合わせます。神帰り杉の下で向きを変えると獅子は猛り狂い、篠葉踊子たちの持つ竹はやしを無茶苦茶に噛んで暴れます。

帰途についた渡御の行列は、縦大門の鳥居を過ぎた広場で休憩した後、野祭りの三つの舞が奉納されます。①神前の舞（神輿担ぎ四人）　②杵振りの舞　③獅子起こしの舞（鼻高と獅子）です。野祭りは、中世の芸能である「田楽」といわれるものです。

平成 26 年の掛踊り

18　牧の掛踊（かけおど）り

平成二十六年十月四、五日の両日、牧地域は二十一年ぶりの大祭礼にわきかえりました。明建神社などに総勢百人を超える役者が登場して豪勢な行列を行い、掛踊りが奉納されました。

掛踊りは大神楽に比べて催される地域が少なく、郡上では北部の十か所ほどに限られています。大神楽（だいかぐら）の三倍近い人数がいることも分布が少ない要因のひとつでしょう。本来は雨ごいの踊りで、願いがかなって御礼踊りとなり、やがて豊年踊りの掛踊りへと発展したと思われます。願を掛けたり、代わる代わるに歌を掛け合ったりしながら踊ったので掛踊りと言ったようです。主役は何と言っても、背中に〝しない〟を負い、腹には太鼓を抱いて打ちつつ舞い踊る四人の若者です。〝しない〟は雨ごいの神の依り代でもありました。

この牧の掛踊りは、いつのころから行われたのでしょうか。しない負いが打つ四個の太鼓のうちの一つに明和元年（一七六四）七月吉日の表

記があることから、少なくとも今から二百五十年ほど前までさかのぼることができます。また、寺社奉行への届け出の記録などから、このころは七日祭と同時に奉納されていたようです。

祭りは村人の社交・娯楽の機会として、大きな喜び、楽しみでした。牧の掛踊りも、豊年を祝い、氏神への感謝とともに住民の和をつなぐ祭事となって長い間受け継がれています。

以下の表は、開催された年の一覧です。

開催年		役者数
明和元年	1764年	73人
明和7年	1770年	73人
寛政元年	1789年	73人
寛政9年	1797年	73人
文化8年	1811年	73人
文化10年	1813年	73人
文政4年	1821年	73人
文政8年	1825年	73人
天保11年	1840年	73人
安政6年	1859年	80人
明治10年	1877年	不明
明治21年	1888年	不明
大正4年	1915年	118人
大正11年	1922年	不明
昭和3年	1928年	不明
昭和11年	1936年	不明
昭和23年	1948年	不明
昭和33年	1958年	不明
昭和52年	1977年	147人
平成5年	1993年	137人
平成26年	2014年	102人

※表は牧の芸能伝承館の資料による

牧のあゆみ

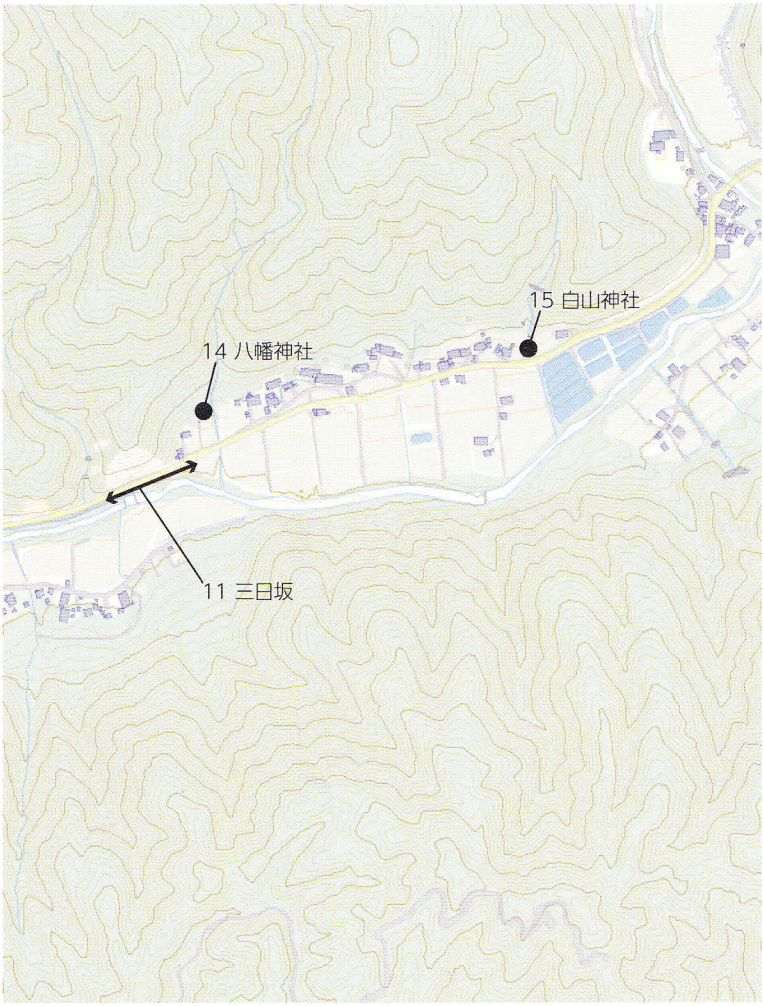
和暦	西暦	できごと
斉衡二年	八五五	武儀郡から分かれて郡上郡となる
寛平年間	八八九～	牧の白山神社（女子宮）創建といわれる
承久三年	一二二一	郡上郡山田荘、東氏の領となる
正中年間	一三二四～	東氏村が、阿千葉から篠脇城を築いて城をうつす。妙見神社も牧にうつる
応永年間	一三九四～	郡上に大洪水がおこる。
応永十六年	一四〇九	東益之が赤谷山城をきずく。治水・開墾に力をつくす。
嘉吉元年	一四四一	水神神社（木戸口清水）創建といわれる
享徳元年	一四五二	常縁の妹、東林寺を開く
応仁二年	一四六八	美濃守護代斎藤妙椿　篠脇城攻略
同年		斉藤妙椿、和歌十首を贈られ篠脇城を返す
文明三年	一四七一	東氏九代東常縁、宗祇に古今伝授
天文九年	一五四〇	越前朝倉勢篠脇城を攻めるも敗退（篠脇城の戦い）
天文十年	一五四一	八幡東殿山に城を移す
永禄二年	一五五九	東氏滅亡（東氏の治世十一代、三百四十年間）
天正十五年	一五八八	稲葉氏の領下となる
慶長五年	一六〇〇	遠藤氏の領下となる
元和二年	一六一六	くるす村（現在の牧・東俣・西俣・母袋）の名がみられる（元和郷長）
寛永十九～二十年	一六四二～三	大飢饉
正保二年	一六四五	牧村の名前がみられる　（正保郷帳）
元禄五年	一六九二	井上氏の領下となる
元禄十年	一六九七	金森氏の領下となる
宝暦四年	一七五四	宝暦騒動おきる
宝暦八年	一七五八	宝暦騒動おさまる
宝暦九年	一七五九	元兼東林寺跡から懸佛発掘
明和元年	一七六四	掛踊奉納

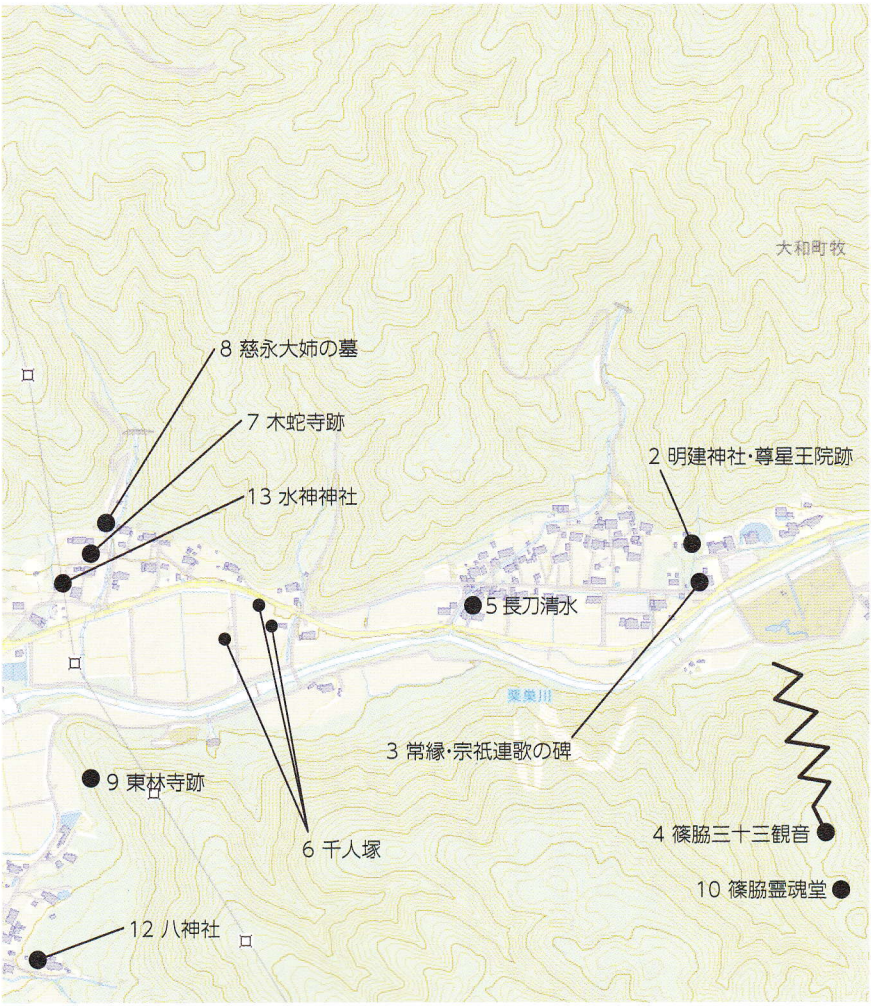
明和七年	一七七〇	掛踊奉納
天明二年	一七八二	天明飢饉
寛政九年	一七九七	掛踊奉納
文政十一年	一八二八	梶村事件（民造事件）おきる
文政十二年	一八二九	大雪六尺（約一・八m）
天保三年	一八三二	八幡城主青山幸寛逝去により七日祭差留
天保四年	一八三三	大凶作、大地震　天保の飢饉
天保五年	一八三四	疫病はやる、妙見宮にて踊り始め
天保九年	一八三八	大塩平八郎事件、人相書廻る
天保十一年	一八四〇	大凶作
天保十五年	一八四四	掛踊奉納
嘉永七年	一八五四	妙見宮拝殿上棟大島村から獅子舞たのみ奉納
安政二年	一八五五	異国船渡来　牧村から人足二人出府
安政四年	一八五七	地震つづく
安政六年	一八五九	疱瘡はやり子ども多く死亡
文久三年	一八六三	大洪水、掛踊奉納
慶応二年	一八六六	大雪一丈三尺（約三・九m）
明治元年	一八六八	大風民家一戸崩壊
明治五年	一八七二	明治維新　神仏分離令　妙見神社から明建神社に名前が変わる　大凶作
明治八年	一八七五	庄屋等村方三役廃止、戸長・副戸長を置く
明治十二年	一八七九	初の町村合併　十五か村にまとまる
明治二十年	一八八七	牧戸長役場開設
明治二十一年	一八八八	大門下水路開設
明治二十三年	一八九〇	掛踊奉納
明治二十六年	一八九三	大門下耕地整理
明治二十七年	一八九四	暴風雨降雨量六〇七ミリ
明治二十八年	一八九五	日清戦争始る
明治二十九年	一八九六	日清戦争終る
明治三十年	一八九七	暴風雨住家半壊九戸損害四十戸、浸水五戸
		牧村他五ケ村合併、山田村となる。郡制発足

明治三十六年	一九〇三	木蛇寺に東氏代々の墓建立
明治三十七年	一九〇四	日露戦争始る
明治三十八年	一九〇五	日露戦争終る
明治四十一年	一九〇八	篠脇城跡に東家の碑建立
大正元年	一九一二	暴風雨
大正三年	一九一四	第一次世界大戦始る
大正四年	一九一五	大正天皇即位御大典、掛踊・仁輪加・獅子舞奉納
大正九年	一九二〇	牧に電灯つく
大正十一年	一九二二	掛踊・仁輪加・獅子舞奉納
大正十二年	一九二三	牧消防組結成、郡制廃止、関東大震災
大正十四年	一九二五	二十五歳以上の男子に選挙権
大正十五年	一九二六	大正天皇崩御　年号昭和となる
昭和四年	一九二九	昭和天皇即位　御大典　掛踊奉納
昭和六年	一九三一	満洲事変おきる
昭和七年	一九三二	元兼地区開畑四町歩　越美南線　弥富駅山田駅同時開通
昭和八年	一九三三	牧道路改良　六十間新道新設
昭和九年	一九三四	室戸台風、大雪一・五m
昭和十一年	一九三六	掛踊・仁輪加・芸神楽奉納、牧道路県道となる、大雪一・五m
		※歌舞伎が流行し俄芝居（にわかしばい）が素人の間で楽しまれ、仁輪加といった
昭和十二年	一九三七	日中戦争おきる　満州に瑞穂開拓団をつくる
昭和十四年	一九三九	消防組を警護団と改称
昭和十五年	一九四〇	皇紀二千六百年祭挙行
昭和十六年	一九四一	太平洋戦争始る
昭和十九年	一九四四	東南海地震（M8）
昭和二十年	一九四五	近次に松根油工場設置、三河湾地震（M7）太平洋戦争終わる
昭和二十二年	一九四七	警護団を消防団と改称
昭和二十九年	一九五四	栗巣川大洪水　元兼橋・島橋・タバタ橋　流失
昭和三十年	一九五五	山田・弥富・西川村合併　大和村となる
昭和三十一年	一九五六	元兼橋完成
昭和三十二年	一九五七	大和村消防団となる
昭和三十三年	一九五八	掛踊・仁輪加・芸神楽奉納

昭和三十四年	一九五九	伊勢湾台風
昭和三十五年	一九六〇	十一・十二号台風
昭和三十六年	一九六一	北美濃地震（M7）、大和有線放送開設、第二室戸台風
昭和三十八年	一九六三	三八豪雪　大雪一・五m
昭和三十九年	一九六四	牧水路完成　開田四・五町、岐阜乗合バス栗巣線開通
昭和四十年	一九六五	下牧共有林造成（一町歩）　二十三号台風
昭和四十三年	一九六八	下牧火葬場改築
昭和四十八年	一九七三	電話開通、篠脇城跡岐阜県史跡に指定
昭和四十九年	一九七四	有線放送電話廃止、元兼に大和村稚蚕飼育所建設
昭和五十年	一九七五	木戸口清水大和村史跡に指定、七日祭岐阜県重要無形民俗文化財に指定
同年	一九七五	慈永大姉墓岐阜県史跡に指定、古瀬戸灰釉四耳壺大和村重要文化財に指定
昭和五十二年	一九七七	掛踊・歌舞伎・芸神楽奉納
昭和五十三年	一九七八	岐阜乗合バス栗巣線廃止、ほ場整備事業始る
昭和五十四年	一九七九	ほ場整備事業完成（十六町歩）東氏館跡発見・翌年より発掘調査
昭和五十五年	一九八〇	大和村水道事業下牧地区一部完成
昭和五十六年	一九八一	五六豪雪　大雪二m　翌年集中豪雨被害大
昭和五十七年	一九八二	七・二二災害　集中豪雨被害大
昭和五十八年	一九八三	東林寺跡出土掛仏岐阜県重要文化財指定（応徳寺保管）
昭和六十年	一九八五	大和町となる
昭和六十一年	一九八六	木戸口清水岐阜県名水指定　島橋完成
昭和六十二年	一九八七	東氏館跡庭園国指定名勝となる
昭和六十三年	一九八八	大和町歴史民俗資料館完成、下牧集会所完成、薪能くるす桜始まる
平成元年	一九八九	古今橋、タバタ橋完成
平成二年	一九九〇	県道寒水線三日坂改良工事完成
平成五年	一九九三	古今伝授の里フィールドミュージアム完成、掛踊・歌舞伎・芸神楽奉納
平成九年	一九九七	常陸宮夫妻　古今伝授の里フィールドミュージアム来訪、篠脇霊魂堂再建
平成十一年	一九九九	牧公民館完成
平成十六年	二〇〇四	台風二十三号により栗巣川大洪水、妙見大門下左岸大崩落　三町四村合併し郡上市に
平成十七年	二〇〇五	大雪一・五m、小牧田樹木三十本倒木、栗巣洞三日間停電、明建神社雪害大
平成二十六年	二〇一四	掛踊・歌舞伎・芸神楽奉納
同年	二〇一四	牧地内史跡に案内看板を建てる、「桜本親水遊歩道」整備

地図




大和町牧
8 慈永大姉の墓
7 木蛇寺跡
13 水神神社
2 明建神社・尊星王院跡
5 長刀清水
3 常縁・宗祇連歌の碑
9 東林寺跡
6 千人塚
4 篠脇三十三観音
10 篠脇霊魂堂
12 八神社

あとがき

『大和町史』、『東氏ものがたり』をはじめ、東氏文化顕彰会等大和町の歴史文化の編集に関わってこられた先輩諸氏の資料を参考にさせていただきました。その中でも平成十一年頃に出された加藤一男さんの『篠脇の里』に依るところが大です。『篠脇の里』は、百二十余ページすべて手書きにカラー写真が切り貼りされた手作りの大作です。冊子の冒頭に「伝統ある故郷をこよなく愛し、守られてきた先祖の方々に対し先ず感謝しなければなりません。祖先から残された歴史・文化を大切に保存、守ってゆくことがこの里に暮す私達の務めでないかと思います」と加藤さんは記されています。多くの歴史文化が残る大和町牧地区、その時代の人々の生活と心を偲びつつ、先人が残してくれた遺産を土台にさらに新しい文化を築きながら私たちは未来へと引継ぎ、その夢を託したいと思います。

平成二十五年度に「郡上市集落総点検・夢ビジョン策定モデル事業」の補助金を受け、牧地区に点在する史跡の整備と史跡文化財の標識板の設置を地元有志団体である「篠脇文化顕彰会」が中心となって実施してきました。

さらに平成二十六年度には「郡上市魅力ある地域づくり推進事業」の助成金を受けて、地域内の桜並木等の自然環境の手入れをすると共に二十五年度に設置した史跡の標識板の内容を少しでもご理解いただきやすい文章にして、地域住民の皆さんをはじめ多くの方々にこの冊子を手に持って頂き、地域の歴史文化を偲びながら健康ウォーキングコースとしても歩いていただきたいとの思いでこの冊子を作成いたしました。

この冊子により、地域について学んでいただいたり、また東氏文化の顕彰に少しでも役立てばと願っております。

平成二十七年三月

編集委員代表　三浦泰治

参考資料

『篠脇の里』加藤一男２０００頃
『牧史談会会誌』創刊号　金子徹編（牧史談会）１９８９
『牧史談会会誌』第二号　金子徹編（牧史談会）１９９１
『郡上郡史』郡上郡教育会編（大衆書房）１９７０
『大和村史』史料編（大和村）１９７８
『大和村史』通史編上巻（大和村）１９８４
『大和町史』通史編下巻（大和町）１９８８
『大和町の文化財』大和町教育委員会編（大和町）１９９５
『図説　郡上の歴史』（郷土出版社）１９８６
『東氏ものがたり』（東氏文化顕彰会）１９８８
『郡上の祭り』寺田敬蔵（郡上史談会）１９７７
『大和村歴史年表』（大和中学校社会科部会）１９７５
『美濃の文学史跡』美濃地区高等学校国語研究会（一つ葉文庫）１９９４
『昭和万葉集』巻二十　（講談社）１９７５
『史苑やまと』（大和町郷土史研究会）
『郡上史談』（郡上史談会）　ほか

牧の昔をあるく

平成二十七年三月　発行

編集　『牧の昔をあるく』編集委員会

編集委員長　三浦　泰治

尾藤　政之

田口　勇治

金古のり子

瀧日千代美

監　修　金子　徳彦

表　紙　金古のり子

発　行　篠脇文化顕彰会

この冊子は「郡上市魅力ある地域づくり推進事業補助金」の助成により作成しました。

篠脇文化顕彰会　2015